

グリム兄弟における「ニーベルンゲンのなもの」と「ドイツ的なもの」

大野 寿子

森はいつでも、我々のいる場所から少しばかり向うの方にあるのだ。森は、我々のいる場所からついさっき立ち去ったばかりであり、まだ真新しい足跡が残っているだけである。¹⁾

(オルテガ・イ・ガセット『ドン・キホーテをめぐる省察』より)

グリム兄弟の歴史意識およびポエジー観をシェリング受容の観点から考察した O. エーリスマンは、グリム兄弟の自然の文献学 (Philologie der Natur) の特質に触れながら、グリム兄弟のニーベルンゲン観をこう要約している。「ドイツ人の自然〔本性〕 — ないしはドイツ民族を対象とする自然の文献学 — は、その民族の歴史 (Geschichte) を繰り返し繰り返し把握し形成するニーベルンゲンのものの中に投影されている」(傍点筆者)。²⁾ グリム兄弟の論文や書簡において実際盛んに用いられている、この「ニーベルンゲンのもの」das Nibelungische という語は、彼らの文献学研究の本質を知る際に重要な役割を果たすばかりでなく、彼らの考える「いにしえなるもの」das Altertümliche、「ドイツ的なもの」das Deutsche、あるいは「自然的ポエジー」Naturpoesie の意味を解く上でも大きな鍵となる。

ヴィルヘルム・グリムは初期論文『古代ドイツ文学の成立とその北歐文学との関係について』(Über die Entstehung der Altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen, 1808) において、「ドイツの歴史記述 (Historie)³⁾ が、ギリシア人たちのそれとは異なり、蓄えられた古い国民の伝説 (Nationalsagen) からは発展しなかった」⁴⁾ と、両者の非連続性を嘆く。その理由として彼は、ドイツ史上のフランク王国時代の事例を挙げている。すなわち、カール大帝 (在位768-814) が文教政策の一環として「過ぎし時代の戦いや事績を内容とする」歌謡、自国のポエジーを「蒐集させ、書き留めさせ、自ら暗唱し」、それらを保存しようとしたのに対し、ルートヴィヒ敬虔王 (在位814-840) は、自身が「ギリシア語、ラテン語に自分の母国語にも劣らず通じていた」こともあり、これを忌み嫌ったというのである。この背景には、当時の教養というものがすべて「外国製」ausländisch しかありえなかったという事情もある。従って当時の歴史記述家たちがドイツの歴史を著わす場合も、「ラテン語で、ローマの規範に倣って」書き、彼らは批判的研究の精神も「〔自国の〕古い伝説を信ずる揺るぎない信念」も持ち合わせてはいなかった。すなわち、これらがすべて絡み合っただけで自国のポエジーの存続を困難にしたとヴィルヘルムは考えるのである。しかしながら彼の論述は必ずしも悲観的ではなく、その苦境をものともせず民衆の

間で生き続けた「歌謡の力」そのものの方に、むしろ力点が置かれる。⁹⁾

コンラート I 世 (在位911-918) により開花するシュタウフェン王朝期においてようやく編纂されるに至った国民的ポエジー『ニーベルンゲンの歌』は、ドイツ人にとって「古い歴史よりもはるかに純粋で、生き生きとした表象を与えるもの」⁶⁾ として、グリム兄弟から絶賛される。実際グリム兄弟は、K. W. ゲットリング、B. J. ドツェーン、F. H. v. d. ハーゲン、K. ラッハマン等のニーベルンゲン研究者と交流を持ち、その相互影響関係の中で古代ドイツ文学、古代北欧文学研究、とりわけニーベルンゲン伝説の研究を盛んに行っていた。⁷⁾ そのような研究によって培われた、歴史と英雄叙事詩との関連性、ドイツとニーベルンゲン伝説との関連性に関する独自の見解は、ときおり思弁的になりはするものの、むしろそれ故に自由で力強い表現を伴い、二人のポエジー観を一層豊かなものとした。グリム兄弟が、A. v. アルニム、A. W. シュレーゲルに代表される同時代の知識人たちとのポエジー論争を繰り広げる際に、「人為的ポエジー」Kunstpoesie に対置させた「自然的ポエジー」の像は、従来の研究においては、彼らが好んで用いた「自然」Natur、「民族」Volk、「いにしえ」Altertum、「自ずから成る」Sichvonselbstmachen といった概念によってのみ把握される傾向にある。しかしながらそれらの構成概念に、さらに「ニーベルンゲ的なもの」という観点を加えることによって、「自然的ポエジー」像が一層鮮明な輪郭を獲得すると思われる。本稿は、グリム兄弟が論文や書簡においてさまざまな角度から説明を試みる「ニーベルンゲ的なもの」を抽出し考察することを通じて、彼らが思い描いた「いにしえなるもの」、「ドイツ的なもの」に新たな光を当てようとするものである。

1. ポエジーと歴史記述における「生」

ヴィルヘルム・グリムは先に挙げた論文において、さまざまな国民を北方、南方、そしてドイツの三種に類別し、それぞれの国民的特性と、それを代表する諸伝説の紹介を行っている。⁸⁾ まず第一に、北方を代表するものとして、角質のジークフリート伝説、ヴィーラントの子ヴィティヒ伝説を挙げ、そこに現れる「北方風の深遠」die nordische Tiefe、「巨怪」das Ungeheure und Riesenhafte をもって「北方的なもの」と見なしている。第二番目に「南欧的なもの」に言及し、ヴォルフディートリヒ、オットニート、コンスタンチノーブル物語等に現れる「はるかに多彩で温かな色調」ein viel farbigeres und wärmeres Colorit、「オリエントとその溢れんばかりの豊かさへの記憶」manche Erinnerung an den Orient und seine Üppigkeit をその特質であると考え。そして第三番目にドイツの国民的伝説として、他にもない『ニーベルンゲンの歌』⁹⁾ およびアッチラ、ハーゲン、グンテル、クリームヒルトにまつわる諸伝説を挙げ、この伝説歌謡に現れる「美しき融合」eine schöne Vereinigung、「和らげられた偉大さ」eine gemilderte Grösse、そして「愛」die Liebe が「ドイツ的なもの」を形成していると説く。とりわけ「愛」は、北欧ニーベルンゲン譚においては「破廉恥で激烈で粗野」な現れ方をしているのに対し、ドイツのニーベルンゲン伝説では「慎み深く」、「ドイツ的良風美俗」を示しているというのである。¹⁰⁾

12世紀から13世紀にかけて成立したと考えられるドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に関する研究を試みるにあたりヴィルヘルムは、「それが真実に基づいている」¹¹⁾ という前提に立ち、ポエジーと歴史との密接な関わりをこう指摘する。

ある民族(Volk)の最も初期の時代に遡れば、ポエジーと歴史記述(Historie)が一つの心情(Gemüth)によって分かたれることなく保持され、自ずから感動のことばとなって現れ出たことに気付くのは容易いことである。¹²⁾

ポエジーと歴史記述は、「生をそのすべての現れにおいて把握し表現する」という点で一つに融合している。ところが、後世の学問的な見方によって両者は道を分かち。すなわちポエジーの方にだけ「無制限の生成」unbeschränktes Aufwachsen が容認されるその一方で、歴史記述の領域では、「民族の詩」Volksgedichte の真実(Treue)への信仰が失われてしまったがために、その対象が「批判的真実」kritische Wahrheit のみに制限される結果となった。しかしながらこの「批判的真実」の価値は、より高尚な詩的真実と結合して初めて生ずるとヴィルヘルムは考える。なぜなら、ある出来事を単にそれ自体として認識するのではなく、その出来事を「生との連関」Zusammenhang mit dem Leben において認識することこそが肝要だからである。従って「批判的歴史記述」の使命は、他にもない歴史記述とポエジーが「国民的叙事詩」Nationalepos として渾然一体であった過去、すなわち「最も初期の時代」に到達する方法の模索でなければならない。この「最も初期の時代」はさらに、「分散して拘束されずに生きる一民族が、秩序、文化、慣習の必要性を感じずる歴史上の一地点」とも言い換えられ、その時代を以下のように説明し称えている。¹³⁾

ポエジーと歴史記述は、叙事詩として一つの根から芽を吹き、両者とも並んで花開く。ポエジーはその後も常に歴史記述を伴う。すなわち、実際に何かが起こり生が脈搏つところでは、必ず感性が揺り動かされ、その生を表現しようとする。¹⁴⁾

出来事とそれを表現する力、つまりある出来事を成す「生」とそれを表現する「生」とは表裏一体であり、それらの「生」が融合した形姿としての叙事詩の存在が尊ばれるのである。さらにその叙事詩、とりわけドイツ英雄叙事詩の最高峰と目される『ニーベルンゲンの歌』についてはこう語られる。

このロマン的な国民的ポエジーは、ドイツの先史時代のすべてを、もっとも偉大な英雄行為や戦いから家庭単位の生活に至るまでのすべてを包括する壮大な像であった。(中略) そもそも生の圏内にあり、その生の中に纏れ合いながら身を置くもので、この叙事詩が描写の対象としていないものはない。¹⁵⁾

すなわちヴィルヘルムの考えるところでは、『ニーベルンゲンの歌』という英雄叙事詩

に表わされているものは、男たちの戦い、国民全体の滅亡から女たちの夢物語や恋物語に至るまで、すなわち全体から個別に至るまで、あるいは一方の際から他方の際に至るまで極めて広範囲にわたる「生」そのものであり、裏を返せばこの「生」において、普遍的なものと個人的なものとが連関しているのである。

ところでヤーコブ・グリムは、歴史記述という用語は用いてはいないものの、歴史とポエジーは叙事詩を通じ最も距離が接近すると考え、叙事詩に語られている内容がいにしえを啓示すると見る。しかし、この歴史と英雄伝説の関連性と、そこに現れる「生」のダイナミズムをどう見るかは、それを研究する研究者の視点に左右される。『ゲットリング著「ニーベルンゲンの歌における歴史的なものについて」』(Über das geschichtliche im Nibelungenliede von K. W. Göttling, 1814)という書評においてヤーコブは、自らの方法論に関して次のように語る。

著者ゲットリングは、(中略) 限なく伝説に彩られた歴史の中にすら、多かれ少なかれ歴史的素材を見て取るに違いない。我々〔兄弟〕¹⁶⁾ は、全く反対に、そのような歴史の中に、叙事詩的素材のはたらきを見て取るという考えから出発する。¹⁷⁾

『ニーベルンゲンの歌』における悲劇性をシェリングは、「無意味で盲目的で冷たい破壊」と見なす。¹⁸⁾ さらにO. エーリスマンによればこの叙事詩には、シェリングの唱える「愛」、すなわち最初の衝動(Antrieb)でありかつあらゆる展開の動因ともなるもの、まさに「始まりでありかつ終わり」であるものとしての「愛」がまず現れ、筋の進行が「運命」にゆだねられ「経過」と言う。グリム兄弟がこだわった、「歌謡における歴史の表出」に對抗する「歴史における歌謡の表出」¹⁹⁾ とは、『ニーベルンゲンの歌』の中に歴史的なものを探すのではなく、「古いドイツの歴史の中にニーベルンゲンのものであるもの」すなわち「生」の広がりを探すことであった。ここで重要なことは、グリム兄弟はニーベルンゲン伝説をあくまでも創作ではない「真実の詩」、有史以前のもの、さらには「歴史を越えたもの」と見なしているということである。²⁰⁾ 彼らは、反復されうる英雄行為、およびそれを取り巻く「生」の環境を表出するニーベルンゲンの主題を、やはり「生」の絶えざる連続性を綴っている歴史に求めたのではないだろうか。「ニーベルンゲンのもの」とは従って、叙事詩の主題の一部ではなく、むしろそれこそがドイツの叙事詩的主題そのものとなりえたのである。

2. 「歴史的なもの」と「神話的なもの」の融合としての「叙事的なもの」

グリム兄弟は同時代のニーベルンゲン研究者 K. ラッハマンと書簡を交わし、²¹⁾ 書物や論文の形では言い表せないニーベルンゲン観を、「憶測」と「定まらないアイデア」を交えつつも率直に語っている。²²⁾ とりわけ、1821年6月26日に記されたヴィルヘルムのラッハマンに宛てた書簡は、「鋭い感覚」と「恵まれた感性」を有するラッハマンに助言を請

う「自由な発言」であり、そこからは、グリム兄弟のニーベルンゲン観の背景にある根本姿勢をうかがい知ることができる。²³⁾

この往復書簡の争点は、まず第一に、『ニーベルンゲンの歌』と『ローゼンガルテン』の類似点および相違点を、歴史的事実と照応させながら詳細に至るまで検証した結果導き出された双方の関連性である。すなわちラッハマンが、「ニーベルンゲンに関する伝説は、もともとディートリヒ伝説群とは別個であり、後にそれらが融合した」と、両作品の後期融合説を唱えるのに対し、ヴィルヘルムは、ローゼンガルテン叙事詩が、「ある意味では、ニーベルンゲンの歌とはもともと一つのものであった」と全く反対の立場を取り、詳細に反論している。²⁴⁾ 第二に、ニーベルンゲン伝説の骨格が「宝に起因した呪いによる、ある英雄種族の没落」であると主張するラッハマンが、その骨格もしくは主題を北歐から伝播したものと見なすのに対し、ヴィルヘルムは、北歐伝説および北歐神話の古さとそのドイツ文学への影響関係を容認しはするものの、むしろニーベルンゲン伝説の主題のドイツ性を主張する。²⁵⁾ これらの反論は、『ニーベルンゲンの歌』および『ローゼンガルテン』の話の展開のみならず、韻律、語法等の細部にまで及ぶものであり、それらは全部で十項目にわたる。しかし本論では、二人の論争の内容を文献学的に吟味したり、その正否を判断したりすることが目的ではない。そうではなく、ラッハマンの北歐起源説、および「神話的なもの」das Mythische の重視に反駁するために「自由に」記されたヴィルヘルムの思考のプロセスを追うことにより、彼の考える「歴史的なもの」das Geschichtliche と「神話的なもの」の『ニーベルンゲンの歌』における関連性、さらに両者の混交としての「叙事詩的なもの」と「ドイツ性」との関連性を明らかにすることが目的なのである。

まず第一にヴィルヘルムは、叙事詩における「歴史的なもの」と「神話的なもの」に言及する。彼はまず最古のポエジーを「あらゆる叙事詩に先立つ」ものにして、「我々の精神的な生の多かれ少なかれ不分明な啓示」と見なし、そこに「人間の自然〔本性〕のあらゆる方向性」が、「いまだ分割されない一なるもの」として包含されていると考える。その最古のポエジーの流れを汲む叙事詩とはグリムによれば、「現実の歴史をある根本的な宗教的見方と結びつけることによって把握する」一種の歴史把握に他ならず、従ってそれが志向するものは「歴史的なもの」以外の何ものでもない。叙事詩におけるこのような歴史性の存在が彼らの叙事詩理解の前提となる。しかしながらその「歴史的なもの」が叙事詩においては「現実」から「精神的自由」、換言すれば「詩的真実」へと引き上げられているために、「歴史的なもの」の確実な歴史的基盤を探り当てることは不可能に近いとヴィルヘルムは考える。すなわち「歴史記述としての性質が完全に失われ」てしまっているのである。そしてその結果、他でもない「神話的なもの」の自然な経緯に基づく排除、つまり「神話的なものの沈降」Hinabsinken des Mythischen もまた、叙事詩内部で進行するのである。この「神話的なものの沈降」は後の記述では「より初期の、より完成された状態からの沈降」とも言い換えられる。叙事詩においては、「描写の瑞々しい躍動」と「描写の詩的真実性」が尊ばれるが故に、「神話的なもの」は、このような連関においてしか価値を有さなくなるのである。²⁶⁾

この主張を基盤にヴィルヘルムは、「神話的意味と歴史的内容の両要素が一体のものとして現れる」その現れ方にこそ叙事詩それ自体の本質があると説く。この両要素の一体となったものが、詩的真実の表出としての「叙事的なもの」das Epische に他ならない。この見解は、ラッハマンおよび他のニーベルンゲン研究者の唱える、『ニーベルンゲンの歌』の北歐起源説、ひいてはアジア起源説を何も根本的に否定するものではなく、むしろその神話的な核の存在をそこに認めている。しかしながらそれよりも重要なのは、神話的な核が「歴史的なもの」と融合し「詩的真実」へと高められている事実なのである。²⁷⁾

第二の主張は、北歐編成のニーベルンゲン伝説とドイツのニーベルンゲン伝説とが「発展の過程で枝分かれした」という内容である。これは、前述の『ローゼンガルテン』と『ニーベルンゲンの歌』の同一起源説に繋がる重要な主張である。ヴィルヘルムは、『エッダ』と『ニーベルンゲンの歌』のそれぞれの成立時期、すなわち6世紀と12世紀との間に、「ディートリヒ伝説群との結合」、「史実のアッチラとの完全な連関」が生じる「もう一つの段階」がおそらく9世紀あたりに存在していたと推測する。さらにこの段階で「アトラクキダ」と「第三のグドルーンの歌」に関する知識が北歐へと伝播した可能性をも指摘する。8世紀後半の「書き記されたものへの欲求」が初めて呼び覚まされたカール大帝の世に、この『ニーベルンゲンの歌』がすでに書き留められていたのではないかとヴィルヘルムは考えるのである。²⁸⁾

さらにヴィルヘルムは、先にもふれたさまざまな素材や名称のドイツ起源の可能性、たとえば、ジークルト（ジークフリート）がドイツ人であるという事実や、ニーベルンゲルがドイツ名であるという事実、また、「殺された者を黄金で覆う」といった殺戮の贖罪の習慣が北歐の法には存在しないなどの理由から、『ニーベルンゲンの歌』がドイツに源を発することを主張する。しかしながらこれは、先にも述べた北歐伝説や北歐神話との同一起源説もしくは融合説に矛盾するものでは決してない。それは、純粋に「歴史的なもの」も、純粋に「神話的なもの」も叙事詩においてはもはや存在せず、叙事詩にとって重要なものはむしろ、その両者が混合して「詩的真実」へと昇華されて初めて存在する「叙事的なもの」すなわち「ニーベルンゲンのもの」につきるからである。この「叙事的なもの」は、叙事詩が唯一成立しえたとヴィルヘルムの考えるドイツにおいて、ある種の普遍性を帯びることになる。彼は、ラッハマンが『ニーベルンゲンの歌』の核心を「宝の呪いによる英雄種族の没落」と見るのに対し、「すさまじい戦い」こそニーベルンゲンの主題に他ならないと見る。つまりこの主題こそが、あらゆる時代を超え、叙事詩においても実生活においても、あらゆる「生」に多かれ少なかれ反復される普遍的素材、すなわち「ニーベルンゲンのもの」なのである。²⁹⁾

それではこの普遍性は如何にして獲得されるのであろうか。そして「ドイツ的なもの」といういわば民族的個別性とは如何なる関係があるのであろうか。

3. 自然的ポエジーにおける土着性

外国の教養を身に付けた僧侶により書き記され、国民に固有とはもはや言いがたい無味乾燥な書物にも、「すべての民衆の口と心に生き続けたもの」が保存されている。この一見矛盾するような現象をヴィルヘルム・グリムは「ポエジーの力」という観点から説明する。

ポエジーは無知と無垢な状態で徐々に発展してゆき、新しい出来事や民間信仰などが提供する偉大なことや魅力的なことのすべてを、混合したり混同したりしながら自らの内へと取り込んだ。それらはどんな場所においても次第にその場所に馴染み土着のもの(einheimisch)とならなければならなかった。そしてそのためにポエジーは、地域と時代と民族を変えながら、遠くのものを引き寄せ、近くのを神秘に満ちた遠方へと移し置いたのである。³⁰⁾

かつて無垢と無意識の状態にあつて、その中で〔ニーベルンゲンの歌の〕全体が一つの詩として形成された。無垢と無意識はそれをそのようなものとして以外に思い描くことができなかつた。だからこそ、いつも最上のものを捉える確かさがあり、だからこそ、あらゆるものが新鮮な生命の息吹に包まれ、しっかりとドイツの大地に立っているのである。すべてのものが極めて土着的な風貌をそなえ、そこに外国風な特徴は見つけられない。³¹⁾

時代が進むにつれて姿を変えながら絶えず引き継がれ、ある特定の形式を決して持たないポエジーは、浮動し順応しながら、それを歌う口ごとに異なっていた。ある出来事を語ることもしくは歌うことがあらゆる地方に広がり、その土地の風土、響き、それに色彩というものを身にまとう。こうしていたところで固有の特性と生命力を獲得し、最終的に「土着のもの」となる。このような現象をヴィルヘルムは必然と見なす。さらにこの「土着のもの」となるときに時として介入する「外国製」の教養に関しても、「自らの力で高みに達すべき者は、よその風土に生い茂った緑を自らの目標となし、それと絡み合って成長しなければならなかつた」と見る。³²⁾ ヴィルヘルムは従って、人為的ポエジーもしくは芸術的ポエジーの存在を全面的に否定しているわけでもない。

自然的ポエジーが滅び、もはや新たに生成しえなくなれば、それは民族に固有のあらゆるものをそなえた民族の精神の中で、教養によって獲得された材料を作り変えて我がもの(einheimisch)にする。³³⁾

ヴィルヘルムは教養の介入と、その結果成立する人為的ポエジーをこのように容認してはいる。しかしこれはあくまでも、自然的ポエジーが伝承を通じての自己生成のプロセスをもはやたどれなくなったとき、それも結果的に「自国のものにする」限りにおいて容認

されているにすぎない。これに対しヤーコブは、自然的ポエジーを「枯渇の危機に瀕した森」にたとえ、伐採、開拓という人為介入の危機を懸念し嘆く。そして人為というものを断じて容認せず、いにしへの精神を損ない「鋳直す行為」としての改作にも翻訳にも、真っ向から反対する強硬な姿勢を示す。³⁴⁾ この姿勢は、一見ヴィルヘルムの教養容認の姿勢と対立しているかのようにも見受けられる。しかしながら、この自然的ポエジーと人為的ポエジーの関係を、自然的ポエジー侵食のプロセスでとらえるか、侵食後の再構築の途上でとらえるか、換言すれば、19世紀初頭の自然的ポエジーの危機としてとらえるか、中世に遡るギリシア・ラテン教養主義における自国のポエジーの危機としてとらえるかの違いが存在するだけで、二人の自然的ポエジー賛美は根本的には揺ぎはしない。だからこそ二人は、ハーゲンの『ニーベルンゲンの歌』の現代語訳を、韻律、語法を損なうのみならず、この英雄叙事詩が伝えようとした「生」の息吹を損なうものとして糾弾するのである。³⁵⁾

4. 湿気を含んだ大気としての民族性

ヴィルヘルムは書評『フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン編「ニーベルンゲンの歌」』(Der Nibelungen Lied, herausgegeben durch Friedrich Heinrich von der Hagen, 1807)において、『ニーベルンゲンの歌』の特徴を次のように表現する。

この歌謡には、もはや代替不可能なもの、すなわち、偉大なる生が自由に壮麗に、しかしまたいかにも人間らしく表出していた過去の一時代の像が保持されていた。これこそまさに、ポエジーにおいて我々を魅了するもの、かの神なるものと現世的なるものとの連関に他ならないからである。人間がしっかりと、愛を育みながら大地に立ち、その一方で彼の頭は上方の天を仰ぎ見ている。ポエジーもまたかくあらねばならない。その根をしっかりと地に降ろし、その枝は影と安息所を与え、その一方で木に咲く花は青い日の中へと高く伸びゆき、そこでやがて夕焼けを迎え、夕べのもたらす露で自らを潤し、それから星を、聖なる夜を仰ぎ見るのである。³⁶⁾

ここでポエジーは、大地にしっかりと根差し、天を仰いで聳え立つ「樹木」にたとえられている。その種子がどこからきたのかは問題ではない。その種子がある土地に芽吹き、その土地の水と栄養を得て成長することによって、その土地の風土、響き、色彩と一体化し「土着のもの」となっていることの方がむしろ重要なのである。天と大地を、「神なるもの」と「現世的なるもの」とを仲介するこの大樹は、出自不明の小さな種子から大樹に至るまでのプロセスを、永い時の流れを内包する。つまり、そこには始原と現在とが、始原から現在に至るまでの多様かつ普遍的な「生」の営みが内在しうるのである。この世界樹「ユグドラシル」をも想起させる樹木こそ「愛」、「戦い」、「怒り」そして「生きる喜び」という形で開花する、叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の英雄の「生」の象徴であるとヴィルヘルムは考える。³⁷⁾ この考えは、叙事詩を、神的理念と後に続く諸時代のほざま、すな

わち「超時間的始原」と「現在」のはざまにある、「超歴史性」を帯びた「滋養に富んだ仲介物」と見なすヤーコブのポエジー観とも合致する。³⁸⁾ また、「夕べのもたらす露で自らを潤す」夕刻の描写と同趣旨の表現が、論文集『古いドイツの森』(Altdeutsche Wälder, 1813)のヤーコブの筆による序文にも以下のように現れる。

露のしたたる木の枝に手を触れれば必ず雨のような雫が落ちかかってくるという理由でその木に近づくのを恐れる者にとっては、ここで試みられる集積の多くはあまりにも多彩でどぎつ見え、多くの人にとっては全く違った様相を呈するかもしれない。³⁹⁾

ここでは古いドイツのポエジーが「露のしたたる木」にたとえられている。この「木に近づくのを恐れる者」とは、「古いものに価値を見出さない」教養人、そして「古いものを新しく鋳直すことをよしとする」教養人のことであり、「雫が落ちかかってくる」ことを恐れる態度は、土にまみれることを嫌う態度さながら、ポエジーの保持する「民族にとって自然なもの」の価値を認めない態度と重なる。「露のしたたる木」にたとえらえる古いポエジーは、まず民衆の伝説として、「内に力を秘めた穀物」、⁴⁰⁾ また「明るい天の青」、「緑の木」、「新鮮な水」、「純粋な響き」⁴¹⁾ にもたとえられる。またこの古いポエジーの最古の形態をヤーコブは叙事詩と見なすことから、古いポエジーの本質は、ドイツの民にとっての「ニーベルンゲンのなもの」に換言される。ところで、叙事詩を古い歴史と見なすヤーコブは、古い歴史と古いポエジーの中に自らの自然〔本性〕故に最高度の純粋無垢が開示し、その結果双方が必然的に重なり合うという見解から、叙事詩をさらに、古い歴史の教えとしての「あらゆる崇高で偉大なものを見守る女性」⁴²⁾ にもたとえる。これらすべてを結びつけるものこそ「生」の連続性、すなわち、現代の生といにしへの生、表現するものの生と表現されるものの生との連続性に他ならない。従って、これら古いポエジーにして英雄叙事詩、民間伝説、古い歴史、すなわち「いにしえ」は、露が降りかかるのを恐れて遠ざけられたままであってはならないのである。

ところでこの「露」という比喻は、ラッハマンに宛てた1820年5月31日付けのヴィルヘルムの書簡にも登場する。『ニーベルンゲンの歌』に新しい名称や地名が付け加えられていると主張するラッハマンに対しヴィルヘルムは、そのような付加のプロセスを容認しながらも、それを「罪を知らない、粗野で敬虔なファンタジーもしくは想像力の拡張にすぎず、黙考する悟性の拡張ではない」⁴³⁾ と考え、付加という行為を教養人ではなくむしろ民衆の恣意にゆだねる発言を行う。さらに、「いかなる水も源泉へと運ばれることはない。しかし雲や露から水は深みからほとばしり出た源泉へと落ち、それと混ざり合う」⁴⁴⁾ と記し、湿気を含んだ大気とそこから生じる「露」としての純粋無垢な民衆の想像力が、英雄叙事詩という源泉からの流れに滴り落ち混ざり合い、「土着のもの」となって流れゆく様を抒情的に表現する。

このようにポエジーの自然〔本性〕は、グリムによってときには「樹木」とときには「流れ」にたとえられる。双方とも普遍性と生命を暗示させ、風景の一部として「土着」の意

味合いをも含意しうが、これらのメタファーを根底で支えているのは、「樹木」が根ざし「流れ」が横たわる民族の心情としての「大地」と、これらの風景を取り巻く環境、気候に他ならない。つまり、ここには水分循環の構造が想定されている。「樹木」の生育を促す肥沃な「大地」に適度の気温と湿り気は不可欠であり、降雨もしくは結露現象の結果として「樹木」にしたたる「露」は従って、生の瑞々しさと共に生成の過程をも象徴しうる。また「流れ」にもともと付与されている直線的な時間の概念に、「露」の背後にある水分循環のプロセスが加わることにより、そこに「円環的」な時間の観念すなわち「超時間的なもの」を垣間見ることが可能となる。従って、「樹木」や「流れ」に一見付帯的に表現されているこの「露」こそ、生成の過程をある一瞬に留め置き、永遠と瞬間という一見相反する二概念を一つのものに顕現化するものとして、またあらゆるものを「我がもの」とする瑞々しい生の力を含有するものとして、彼らのポエジー観の要所と見なしうるのではないだろうか。

『ドイツ伝説集』第一巻の序文において、「遠いいにしへの爽やかで瑞々しい精神」（傍点筆者）を伝えるものとして、メールヒェン、伝説、歴史（物語）の三種の「宝」を挙げ、それらをさらに「人間が人生に乗り出すときに親しい道連れとしてつねに付き添う、善良なる守護天使」にたとえるヤーコプは、これらの「宝」を蒐集する際の心がけとして、以下のように語る。

伝説を探する場合も、木の葉をそっと持ち上げたり、枝を注意深くたわめることが大切である。さもないと民衆の心は逃げ去ってしまい、不可思議につつましく絡み合い、木の葉や牧草、たった今降ったばかりの雨の匂いのする自然をそっと垣間見ることができなくなる。⁴⁵⁾

この「木の葉や牧草」、「降ったばかりの雨の匂いのする自然」こそ「民衆の心」であり、「遠いいにしへの爽やかで瑞々しい精神」に他ならない。樹木や牧草の匂い、「降ったばかりの雨の匂い」という、つい今しがたまでそこに存在していたかもしれない、もしくは注意深く接近すればその残滓が感受しうるかもしれない湿り気としての「民族の生の気配」、換言すればドイツ民族にとっての「ニーベルンゲンのもの」を、五感を研ぎ澄ませて丹念に追い求め探し求めることこそ、「歴史の中に叙事詩を見る」という、グリム兄弟が目指したドイツのいにしへの態度であったと言えるであろう。

注

- 1) ホセ・オルテガ・イ・ガセット『オルテガ著作集1』長南実訳（白水社）1998年、49頁。
- 2) Ehrismann, Otfried: *Philologie der Natur – die Grimms, Schelling, die Nibelungen*. In: *Brüder Grimm Gedenken* 5. Hg. v. Ludwig Denecke. Marburg 1985, S.50.

- 3) グリム兄弟はそれぞれの論文や書簡の中で、Geschichte と Historie の二つを使い分けている。前者にはよく「古い」alt という形容詞が施され、年代記および民間伝承から素材を得た歴史書から歴史・物語を広範囲に示すのに対し、後者にはしばしば「現代風」modern、「批評的」kritisch という形容詞が施され、「歴史家」Historiker の手により学術的かつ批評的にまとめ上げられた歴史記述、およびその総体としての歴史学を指す場合が多い。その境界線が定かではない場合もあるが、本稿では Geschichte と Historie にそれぞれ「歴史」と「歴史記述」という訳を施す。
- 4) Grimm, Wilhelm: *Kleinere Schriften* I. 1881. Nachgedruckt Hildesheim/ Zürich/ New York 1992, S.109. (以後 W.Grimm KS と略記し、巻数をローマ数字で記す。)
- 5) Ebd., S.96ff.
- 6) Ebd., S.93.
- 7) Grimm, Jacob: *Über das Nibelungen liet*. In: *Neuer literarischer Anzeiger*, Nr.15. 1807; *Von übereinstimmung der alte sagen*. In: *Neuer literarischer Anzeiger*, Nr.36. 1807; *Von der Hagen und Büsching, deutsche gedichte des mittelalters*. In: *Zeitung für Einsiedler* (Tröstensamkeit) 1808; *Götting, das geschichtliche im Nibelungenliede*. In: *Wiener allgemeine Literaturzeitung*. December 1814; *Über die Nibelungen*. In: *Altdeutsche Wälder*, Bd.2. 1815; *Lachmann, die ursprüngliche gestalt der Nibelungen noth*. In: *Heidelbergische Jahrbücher der Literatur*, Nr.69. 1816; *Acht und vierzig neue Lieder aus den Nibelungen nach der Hohenemser Handschrift B. Nebst unterschiedlichen wichtigeren Lesarten*. In: *Altdeutsche Wälder*, Bd.3. 1816.
Grimm, Wilhelm: *Der Nibelungen Lied, Herausgegeben durch Friedrich Heinrich von der Hagen*. In: *Heidelbergische Jahrbücher der Literatur*. 5. Abtheilung. *Philologie, Historie, schöne Literatur und Kunst*. 8. Jahrgang II 1809; *Über die Originalität des Nibelungenlieds und des Heldenbuchs*. In: *Neuer literarischer Anzeiger*. Bd.III. 1807; *Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen*. In: *Studien*. Bd.IV. Heidelberg 1808; *Bruchstücke aus zwei verlorenen Handschriften der Nibelungen*. In: *Altdeutsche Wälder*. Bd.3. 1816; *Mone, Einleitung in das Nibelungenlied*. In: *Leipziger Litteratur-Zeitung* 1818. Nr.233.
- 8) W.Grimm KS I, S.97ff.
- 9) 石川栄作『「ニーベルンゲンの歌」を読む』（講談社学術文庫）2001年、10～68頁参照。
- 10) W. Grimm KS I, S.97.
- 11) Ebd., S.98.
- 12) Ebd., S.92.
- 13) Ebd., S.92f.
- 14) Ebd., S.94.

- 15) Ebd., S.119f.
- 16) グリム兄弟の論文では、一人称が wir で表されているものが非常に多い。この「我々」には四つの可能性がある。すなわち第一に、通常の論文記述における man に相当する wir、第二に、外国人に対する「我々」ドイツ人の意味合い、第三に、過去の時代の人々に対する「我々」現代人の意味合い、そして第四に、「我々」兄弟の意味合いである。本稿では第二、第三、第四の意味の場合に限り、補足して訳する。
- 17) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften* IV. Berlin 1864. Nachgedruckt Hildenheim 1965, S.85-91. (以後、J. Grimm KS と略記し、巻数をローマ数字で記す。) ヤーコブは、叙事詩研究の方法論として「総合的方法」(詩を歴史的な諸要素から組み立てる)と「分析的方法」(詩を歴史の個別部分それ自体へと分解する)があることを指摘し、ゲットリングのとる方法論を後者、自分たち兄弟のとる方法論を前者とする。
- 18) Ehrismann 1985, S.40f.
- 19) J. Grimm KS IV, S.91. Vgl. Ehrismann 1985, S.40.
- 20) Ehrismann 1985, S.40ff.
- 21) Zacher, Julius (Hg.): *Briefwechsel über das Nibelungenlied von C. Lachmann und Wilhelm Grimm*. In: *ZfdPh* 2. 1870, S.193-215, 342-365, 514-528.
- 22) 「私はできるだけ簡潔明瞭に、しかしこの方が却っていいように思われますのでフリーハンドで私の見解をしたためます。あなたの鋭い感覚や恵まれた感性の助けを借りたいからです。しかし他方では気の進まない面もあります。というのも、意図的にまだ明示することを避けたい憶測や定まらないアイデアを、たとえその一部であっても無理に表明しなくてはならないからです。しかし書簡というものは書物ではありません。ですからいづれ書物においては別のことを見出されるようなことがあっても、それをこの書状の文言から反駁なさってはいけません。」(ラッハマンに宛てた1821年6月26日付けのヴィルヘルムの書簡より) Vgl. Zacher 1870, S.193 u. S.354.
- 23) Ebd.
- 24) Ebd., S.203, 343, 356ff.
- 25) その論拠として彼は、ジークルト(Sigurd)という名の代わりに、北欧の神の名がかつては当てられていたという可能性、ヴォルスング(Volsung)とニフルング(Niflung)という名も北欧神話的なものの残滓でありえること、そしてラインのニーベルンゲ一族が北欧神話のニフルヘイム(Niflheim)に由来する、といった詳細かつ実証的な理由を挙げる。Vgl. ebd. S.347, 358f.
- 26) Ebd., S.354, 355, 363.
- 27) Ebd.
- 28) ニーベルンゲン伝説に関しては、二重の主要編成、すなわち北欧的編成と、二つのドイツ的編成(ニーベルンゲンの災いとヴィルキーナ・サガ)の二重編成をヴィ

- ルヘルムは提示する。北欧編成はドイツの編成よりも古く、8世紀に起源を有し、これはこれでより古い歌謡の存在をも窺わせる。Vgl. ebd., S.356f.
- 29) Ebd., S.357ff.
 - 30) W. Grimm KS I, S.97.
 - 31) Ebd., S.100.
 - 32) Ebd., S.109.
 - 33) Ebd., S.114.
 - 34) Steig, Reinholt: *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm*. Bern 1970, S.115-144. (アルニムに宛てた1811年5月20日付けのヤーコブの書簡。)
 - 35) ハーゲンの勤勉さには敬意を表しつつも、「引用も示唆深いメモも、ある物事それ自体に付随する限りにおいて価値があるものであり、それ自体としてはまったく価値がない」と、ハーゲンの現代語訳を間接的に酷評する。Vgl. J. Grimm KS IV, S.22-51.
 - 36) W.Grimm KS I, S.66.
 - 37) Ebd. 北欧神話に登場する世界樹。この天の上につき出て聳える樺の大樹の枝は全世界の上に広がり、三つの根が樹を支えている。一つはアース神、すなわち神々の住まう処、二つ目は霜の巨人の住む領域、そして三つ目の根はニヴルヘイムに伸びている。(谷口幸男訳『エッダ』(新潮社) 1974年、236頁参照。)
 - 38) J.Grimm KS IV, S.84f.
 - 39) Grimm (Hg.): *Altdeutsche Wälder* I. Hg.v. Otfried Ehrismann. Hildesheim/ Zürich/ New York 1999. S.III.
 - 40) J.Grimm KS IV, S.91.
 - 41) J.Grimm KS I, S.401.
 - 42) Ebd., S.402.
 - 43) Zacher 1870, S.200.
 - 44) Ebd.
 - 45) Grimm (Hg.): *Deutsche Sagen*. Nachgedruckt Frankfurt a.M. 1994, S.24.

参考文献

- Bluhm, Lothar (1997): *Die Brüder Grimm und der Beginn der Deutschen Philologie. Eine Studie zu Kommunikation und Wissenschaftsbildung im frühen 19. Jahrhundert*. Hildesheim.
- De Boor, Helmut (Hg.) (221988): *Das Nibelungenlied*. Mannheim.
- Brackert, Helmut (Hg.) (1990): *Das Nibelungenlied* 2 Bde. Frankfurt a. M.
- Ehrismann, Otfried (1985): *Philologie der Natur – die Grimms, Schelling, die Nibelungen*. In: *Brüder Grimm Gedanken* 5. Hg. v. Ludwig Denecke. Marburg. S.35-59.

- Gerstner, Hermann (⁹1997): *Brüder Grimm*. Hamburg.
- Grimm, Brüder (1994): *Deutsche Sagen*. Cassel 1816. Nachgedruckt Frankfurt a.M.
- Grimm, Jacob (1965): *Kleinere Schriften* 8 Bde. Berlin 1864. Nachgedruckt Hildesheim.
- Grimm, Jacob (1992): *Deutsche Mythologie* 3 Bde. Göttingen 1835. Nachgedruckt Wiesbaden.
- Grimm, Jacob u. Wilhelm (Hg.) (1999): *Altdeutsche Wälder* 3 Bde. Cassel 1813, Frankfurt a.M. 1815-16. Neugedruckt u. hg. v. Otfried Ehrismann. Hildesheim / Zürich / New York.
- Grimm, Wilhelm (1992): *Kleinere Schriften*. 4 Bde. Berlin 1881-83. Nachgedruckt Hildesheim / Zürich / New York.
- Rölleke, Heinz (Hg.) (2001): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm*. Text 1. Stuttgart.
- Schelling, Friedrich W.J. (1966): *Philosophie der Kunst*. Darmstadt.
- Schoof, Wilhelm (Hg.) (1953): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savignyschen Nachlass*. Berlin.
- Schoof, Wilhelm (1999): Die „Altdeutsche Wälder“ der Brüder Grimm. In: *Altdeutsche Wälder* I. Hg. v. Otfried Ehrismann. Hildesheim / Zürich / New York.
- Steig, Reinhold (1970): *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm*. Stuttgart/Berlin 1904. Nachgedruckt Bern.
- Zacher, Julius (Hg.) (1870): *Briefwechsel über das Nibelungenlied von C. Lachmann und Wilhelm Grimm*. In: *ZfdPh* 2. S.193-215, 342-365, 514-528.
- 石川栄作『「ニーベルンゲンの歌」を読む』(講談社学術文庫) 2001年。
- 小澤俊夫(他)訳『グリム兄弟』(国書刊行会) 1989年。
- 木下康彦(他)『詳説世界史研究』(山川出版社) 1999年。
- 谷口幸男訳『エッダ — 古代北欧歌謡集』(新潮社) 1974年。
- 谷口幸男(他)『現代に生きるグリム』(岩波書店) 1985年。
- 永田善久「歴史性／超歴史性の弁証法 — ヤーコブ＝グリムのポエジー観」、東京大学大学院ドイツ語ドイツ文学研究会編「詩・言語」(東京大学) 49 (1995)、115-154頁。
- 成瀬治、山田欣吾、木村靖二編『ドイツ史1 — 先史～1648年』(山川出版社) 1997年。
- 橋本孝『グリム兄弟とその時代』(パロル舎) 2000年。

„Das Nibelungische“ und „das Deutsche“ der Brüder Grimm

Hisako OHNO

Der Naturpoesiebegriff der Brüder Grimm, der von den bisherigen Grimmforschern immer nur mit den Begriffen „alt“, „volksmässig“, „sichvonselftmachen“ oder auch mit dem „nicht stillstehenden Fluss“ (Steig 1970, S.X) gegen die Kunstpoesie erklärt wurde, lässt sich erst mit ihrem häufig gebrauchten Begriff des „Nibelungischen“ genauer erfassen. Dieser Aufsatz hat den Zweck zu präzisieren, was für sie „das Nibelungische“ und darüber hinaus „das Deutsche“ war.

In seinem Aufsatz, *Über die Entstehung der Altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen* (1808) behauptete Wilhelm Grimm, dass es drei Volkseigenschaften gebe, die jeweils durch ihre Poesien repräsentiert würden: „nordisch“ wie der hörnerne Siegfried, „südllich“ wie Wolfdietrich und „deutsch“ wie das Nibelungenlied oder die sogenannte Nibelungensagen (WG/KS I, S.97). In dem gleichen Lied sollen sich „eine schöne Vereinigung“, „eine gemilderte Grösse“ und „die Liebe“ voller „Schamhaftigkeit und deutscher Zucht“ zeigen und „im Kreis des Lebens“ liegen (ebd.). Wilhelm Grimm glaubte, dass die unbeschränkt aufwachsende Poesie und die auf kritische Wahrheit beschränkte Historie in „den frühesten Zeiten eines Volks“ als (National-)Epos „von einem Gemüth ungetrennt aufbewahrt wurde“ (ebd. S.92f.), und dass sowohl die anregende Poesie als auch die nüchterne Geschichte im Zusammenhang mit dem Leben erkannt werden sollte.

Jacob Grimm bemerkte also in seinem Aufsatz, *Über das Geschichtliche im Nibelungenliede von Götting* (1814), dass „epischer stoff“ in „manchen von der sage durchtränkten geschichten wirksamer erblicken“ muss als „historischer stoff (JG/KS IV, S.90).“ Das Epische bzw. das Nibelungische muss also für Grimm die übergeschichtliche Heldentat und die umgebende Alltäglichkeit sein, die das deutsche Volk in ihrer Zeit in eigenen Geschichten und Leben thematisiert und mit denen es sich identifizieren kann.

Im Briefwechsel der Brüder Grimm mit Karl Lachmann wurde hauptsächlich „das Mythische“ und „das Geschichtliche“ im Nibelungenlied und sein Entstehungsprozess informell, aber auch wissenschaftlich diskutiert (Zacher 1870, S.348f.). Gegen Lachmanns Behauptung, dass in der Nibelungensage stofflich fast alles aus dem Norden bzw. der nordischen Mythologie übernommen worden sei, nimmt Wilhelm Grimm den Standpunkt ein, dass die bis ins Detail zusammengehenden zwei epischen Sagen, wie die Deutsche und die Nordische, im historischen Zustand der Ausbildung geschieden worden seien, oder auch dass es

noch eine Stufe geben mag, wo die Verbindung der Nibelungensage mit dem Sagenkreis von Dieterich und dem historischen Attila stattfand (Zacher 1870, S.354ff.).

Obwohl das Nibelungenlied oder das deutsche Heldenepos überhaupt mit „ausländischer“ (WG/ KS I, S.96) Hilfe in der Ausbildung im 12. Jahrhundert aufgeschrieben wurde, obwohl bei dieser im Gemüt eines Volks lang und bewegend bleibenden Poesie stofflich nicht alles deutsch war, wird diese von den Brüdern Grimm dennoch als heimisch anerkannt, insofern sie „nach und nach einheimisch“ (ebd. S.97) wurde und wie „eine Eiche“ (JG/KS IV, S.89) auf deutschem Boden aufgewachsen ist.

Wilhelm Grimms Meinung nach steht die Poesie „tief in die Erde ihre Wurzel dringend“, aber auch hoch „ihre Blüte hinauf in den blauen Tag steigend“ (WG/KS I, S.66), wie ein Weltbaum zwischen Irdischem und Göttlichem, dem Geschichtlichen und Übergeschichtlichen, und sie „erfrische sich an ihrem Thau“ (ebd.) im Abendrot. Auch Jacob Grimm verglich die altdeutsche Poesie mit „einem taunassen Baum“ (Grimm 1999, S.III). Darüber hinaus symbolisiert der Tau „eine unschuldige, gläubige Phantasie“ (Zacher 1870, S.200) des Volks, die bald in den Fluss der epischen Poesie zusammengemischt sein soll. „Die nach frisch gefallenem Regen riechende Natur“ (Grimm 1994, S.24) der Blätter wurde auch mit „dem Volk“ (ebd.) als solchem verglichen. In dieser durch Feuchtigkeit und Duft geprägten Atmosphäre müssten die Brüder Grimm die altdeutsche epische Volkstümlichkeit als Spur und Gefühl des Lebens, bzw. als „das Nibelungische“ gesehen haben.